

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

伊藤ひろみ

論 文 題 目

棺材をめぐる「孝」の言説と実践
—陝西省韓城市党家村を事例として—

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 教授 櫻井龍彦

委員 名古屋大学 教授 成田克史

委員 名古屋大学 准教授 笠井直美

委員 名古屋大学 准教授 西村秀人

論文審査の結果の要旨

1, 本論文の構成と概要

本論文は文化人類学の視点から現代中国における「孝」の伝統観念とそれが家族における親子関係の中でどのように実践されているかについて論じたものである。

中国では伝統的に生前に棺材を用意する習俗がある。本論文はこの棺材を議論の中心において、その準備、使用、埋葬という一連の実践過程から中国人の死生観、孝思想、養老観念、祖先崇拜、喪葬の実態などを綿密な現地調査を通して究明しようとしている。棺材をテーマとして取り上げるのは、孝が死の救済論的な意義をもち、親への敬愛、子孫継嗣、祖先祭祀の三者を生命の連続として一体的に捉える宗教的な生命論であるという認識をふまえ、棺材が孝の宗教的な象徴機能を具体的に表象した「もの」であると理解するからである。

本論文は序章、結章を除いて全部で5章から構成されている。

1, 序章では、研究の背景、問題の所在、先行研究、研究方法、本論文の構成を述べる。棺材は中国人にとって死とは何かという問題につながるが、それを孝思想や靈魂観などの〈観念領域〉とその観念が儀礼（過寿儀礼、葬送儀礼、祖先祭祀儀礼）という行為に反映した〈実施領域〉の両面から考察することを述べる。

その場合に、孝は親への敬愛、子孫継嗣、祖先祭祀を一体とする生命の連続性を重んじることで死の不安や恐怖を乗り越える生命観をもつと捉え、そのために孝には養（養老）・葬（喪葬）・祭（祭祀）が重要な実践であることを指摘した上で、地方の一農村を事例に棺材をめぐる孝の伝統が、家族の中でどのように継承され、変化しているかを課題とする。

2, 第1章では、調査地である陝西省党家村が現在、年間万単位の観光客が訪れる「歴史文化名村」となっていることと、急速な観光化によって公的には資源化されない棺材や喪葬などの伝統的習俗がどのような影響を受けているかを論じている。中国では農山村が貧困から脱却するために、その土地の伝統文化を活用する政策が実施されている。党家村も明清時代からの景観を観光資源として、「歴史文化」の再生が進められているが、上からの政策的な伝統文化とは別に住民の中でだけ維持されてきた伝統もある。棺材にまつわる習俗もその1つであり、本章ではその孝の実践記録を清代以降の地方誌文献から抽出し、現在の党家村住民の孝観念とそれに基づく「伝統習俗」の形成と背景を歴史的に遡って論じている。

3, 第2章では、四合院という伝統的居住空間や「同居同財」のあり方の変化から養老観念の変容を考察している。家屋構造のなかでの老人を重視した居住秩序が現在では維持されなくなっているが、「同居同財」という点からは養老がかろうじて成立しているものの親を安んじさせるだけの理想的な家族形態からは遠くなっている。その一方で養老院に入れるという、家族同居によらない他者への養老の委託もみられ、家族の枠を超えた「家族圏」ともいべき人間関係の中で新しい養老の形が生まれている。また不孝という考え方にも変化が現れ、孝子が準備するものであった棺材を親自らが準備する事例が出てきている。それは親が子どもへの経済的負担を軽減し、社会的に「不孝」のレッテルがはられるのを回避するためであった。子による親の養老という孝の根本精神が揺らいでいることを論ずる。

4, 第3章では、親の長寿を祝う「過寿儀礼」をとりあげ、その伝統的な事例と現在形式的に変化し多様化している事例を通じて棺材のもつ意義について考察している。中年から老年に入る「破老」の

論文審査の結果の要旨

年齢は一定ではないが、新しい人生のステージに入るこの新年、誕生儀礼は華北・西北地域に広くみられ、党家村が属する陝西省では隣接する山西省と類似している。筆者は過寿儀礼にもヘネップが通過儀礼の構造として指摘した「分離・過渡・結合」の三段階がみられるとし、破老を境に老人の長生が祝福されるという。そのことを具体的事例をあげて飲食、贈答品、祝福行為、祭品などの装置から説明する。一方現在では孝子ではなく他人（同僚、教え子など）が主催し、レストランで飲食するなど伝統的形式にこだわらない事例も出てきている。しかし形式の違いはあるものの儀礼の構造的な要素は維持されているとする。

5、第4章では、「喪葬儀礼」をとりあげ、新中国になって伝統習俗である土葬が火葬に変わるなかで、棺材の準備をふくめた孝の観念がどのように変容していったかを論じている。ここでも具体的な聞き取りから孝への思いに幅があることが示される。近代的な火葬に合理性を認め賛同する人もいれば、遺体をそのまま葬ることが本来の孝の道であると主張する者もいる。また火葬しながらも骨灰盒を土葬にするという折衷案的な措置をとる人もいて、土葬へのこだわりは完全には払拭されない。棺材に対しても伝統と変革の狭間でそれにこだわる事例やこだわらない事例があり、土葬、火葬という遺体処理のあり方をめぐって孝の観念、棺材準備にも変化が生じていることを述べる。

6、第5章では、祖先祭祀なかでも墓参りにあたる「清明節」をとりあげ、孝の本質である祖先—親—自分—子でつながる生命の連続体を確立する実践活動が「祖先祭祀儀礼」であることを述べ、祭祀の場である墓地の下に棺があるのは、そこが死者の家、祖先の家として位置づけられることを論じている。党家村は党氏と賈氏の二大姓からなるが、これらの父系出自集団による祖先祭祀は現在では行われていない。清明節が迷信ではなく年中行事という伝統文化として2008年に国家によって法定祝日とされると、党家村でも家族が自分たちの祖先の靈魂を祀る墓参が行われるようになった。それらの観察を通して死後3年という期間を過ぎると親は祖先として認識されることがわかった。また墓地の選定や風水師の関わりから、遺体・骸骨は大地から気を吸収し、子孫は祭祀を通じてその気を継承することで繁栄するという孝の流れが理解でき、まさに孝子が親を祖先にするということが事例観察の結果から導き出される。

7、結章では本論文を章ごとにまとめ、総括すると同時に、研究の出発点であった中国人にとって棺材とはなにか、それをなぜ生前に準備するのかという問題にもどってその理由をあげている。棺材は忌み嫌うべきものではなく、結婚や養子をもらうことと同様に喜事であり、それが生前に準備されれば、孝が引き継がれた安堵感や喜びを親に与えた。棺材は自分が故郷の土に帰る家であり、祖先となる家であるという認識も結局は孝の生命連続一体論から来っていて、棺材が孝の宗教的な象徴機能を具体的に表象した「もの」として理解するからである。

2、本論文の評価

本論文は以下の点において評価できる。

孝の精神は長く中国社会の家父長家族制度を支える根幹であった。筆者によれば孝概念の基本は、自分を祖先と子孫の連続体のなかにおいて生命の継承が絶えないことを認識し、死への恐怖から救済される一種の宗教観として理解されている。この理解の仕方そのものは筆者にはじまるものではないが、孝の原理が、生活の中で具体的実践としてどのように表象されているかを参与観察と聞き取りと

論文審査の結果の要旨

いう人類学的方法で調査し一次資料を集め考察した点において高く評価できるものである。

孝の具体的実践とは生前においては同居して親を養い、死しては礼制にそって親を弔い、死後は祭祀によって親を祖先として崇めることであった。本論文では孝の実践段階を「養老」(第2,3章)、「喪葬」(第4章)、「祭祀」(第5章)に分け、個別の事例研究を重ねて、親—自分—子で結ばれる生命連続体が継承されていく過程を分析した。しかしながら新中国の社会主義政策とその宗教観、また1980年代以降の経済至上主義的な近代化政策によって、孝の捉え方や振る舞い方にも変容がみられる。本論文はそれを内陸部の黄河流域にある一旧村でのフィールドワークによって収集した事例から多角的に検討している。

孝研究は『孝経』以来の文献による思想史的研究が多かったが、近年になって現地調査が可能になると、文化人類学者が葬儀研究に関心を示してきた。そのなかで血族をつなげる根本原理として孝にふれることはあったが、筆者のように棺材という物体をめぐって孝の言説と行為をあつめ、それが現在の家族制度のなかでどの程度機能しているかを全面的に考察した研究はない。筆者が棺材に視点を置いたこともユニークであるし、孝の伝統が守られている側面と新しい変化がみられる側面とが混在するなかでも、火葬による骨灰を墓地に埋めるという火葬と土葬を折衷した葬儀の登場があるなど、現代中国の孝のあり方の変動をよく捉えている。

本論文の事例研究は北方の一地域に限定される。中国は国土が広大であり地域差があるため、本論文の結論が全土の現状として普遍化できるものではないが、孝の精神の歴史的伝統的浸透度と近代中国の画一強制的政策の浸透度からみて、比較的広範囲にみられる現象と考えられる。その意味では筆者の分析結果は現代中国の一般的な動向として理解してよいものであろう。

問題点

以上のように独自性と研究成果の波及性は十分に評価できるが、いくつかの問題点もある。

過寿儀礼や喪葬儀礼などの解釈にヘネップの通過儀礼理論(分離・過渡・結合)とそれを発展させたリーチの境界理論を適用しているが、そういった既存の理論を援用すれば解釈の枠組みはできるが、その枠内を超えて考えることができにくくなる。またこれまでの理論を事例を変えて繰り返すだけで終わることもある。

同じようなことは中国の死生観や葬儀などに関する解釈でも見られ、ワトソン、何彬、中筋由紀子などの先行研究を参考に、そこで使われている概念を利用して説明する傾向が強い。すぐれた先行研究の成果は大いに吸収すべきだが、それへの依存だけではなく新しい思考も求められる。

第5章で、孝を親—子への生命の連続体として捉える考え方に風水書の『葬書』を引用し、気が生命力の根源であり、それが祖先から子孫へ継承されるという気生命論から孝の説明が補充されていく。しかしそれは理論的解釈であり、現実に当事者(党家村の人びと)がそのように考えているかどうかは明らかではない。もしこれが聞き取りから裏付けられれば有効である。

孝の考え方、実践のあり方も時代の変遷、政府の方針などによって変化がみられる。しかしそれでも親に尽くし祖先を祀る孝の伝統が排斥されることはない。すべての伝統文化に言えることであるが、守旧と創生のせめぎあいによって文化は上書きされていくとすれば、孝を包括するより大きな課題として中国人の死生観も変容があるはずである。論文の最後ではその問題にも言及し筆者なりの展望を

論文審査の結果の要旨

提示して欲しかった。

しかしながらこうした課題は次の研究段階で考察するテーマでもあり、それによって本論文の価値や独創性をそこねるものでは決してない。

3. 評価結果の判定

上記4名の委員からなる審査委員会は、平成28年2月12日、本審査委員会を開催し、博士課程（後期課程）のあるべき水準を満たしている、オリジナルな成果を含んでいることなどを確認・評価した。

よって本論文は博士（学術）の学位に値するものと判断する。